郷土室だより

第42号
昭和59年1月15日
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電話 543－9025

八町堀雑記（ざつき） 二

安藤菊二

3 与力同心の町

○与力同心の沿革

『江戸町政録』に、与力の濫觴を記して次のように言う。

慶長五年十月板倉四郎左衛門勝重江戸町奉行たりし時、与力十騎同心五十人を付属せしめられ、寛永八年九月町奉行二人制を定められし時、与力十騎同心五十人を増し、これを二組として、二人の奉行に従属せしむ。後与力を双方五十騎に増す。。中略

与力は始め上総・下総及武蔵国金杉村の内にて一万石の地を給せられ、後ち金杉村は上野領となり、替地を下総にて給せらる。与力は一人二百石を以て定額とす。。中略

同心は三十俵二人扶持を以て定額とし、子弟にして仮抱入は二十俵二人扶持なり。中略

受領地は、与力は一人三百坪、同心は百坪にして、同心の分は町屋敷なれば、市人に貸与することを得るものなり。。中略

慶長年間与力は金杉村にて住地を給せられ、同心は役所の構内に住したりしと云う。寛永に至り、八丁堀法泉寺、願成寺、長応寺の地を召上げられ、大縄地として受領し、之に移れり。（『江戸町政録』―市街篇四―一九五頁）

○与力の地行地沿革

東京都公文書館所蔵の、佐久間長敬の『雑稿』の中に、「与力の知行所沿革」として、知行米収納について記すところがある。実見談なので、余人には想像もおよばぬ点が多く、すこぶる参考になる。曰く。

与力の知行所沿革。創立の際には、金杉村にてその知行所を賜はりしが寛永年間上野寛永寺建立に付、替地として安房上総下総のうちにて拝領す。与力は二百石を以て定とす。此収入は凡て検見取を以てその収穫を定むる故に、豊凶によりて増減ありき。小物成、俗に雑税として収入するものは、大豆・小豆・塩・ごまめ等なりき。夫人（賦カ）として百姓の壮年を徴発して召し使ふ。百石に付二人の割なり。

米穀は五斗俵を一俵と定め、豊作の時は二百七八十俵を得る事あり。凶作と雖も二百俵を下らず。地頭に於て罹災等の事ある時は、知

江戸乃花名勝会「茅場町」慶応元年（1865）
（国久、豊国、広重画）

行所へ用命を申付る事あり。万石に十円程の割なり。返済は年賦を以てす。収入庶務を取扱う為、代官と称へ、知行所より一人の総代を呼寄をき、与力筆頭のもの二人之を監督使役し、万事を取扱たり。

収入之時期に至れば、船積を以て八丁堀亀島町の川岸、与力自分持のもの揚場へ積来り、之を処理したり。同心は一人三十俵二人扶持を定めとす。徳川氏の御蔵前にて之を渡すものとなす。外に拝領は町屋敷となりて、町人に貸し与へ、其地代を収入となしたるものなり。

○代官屋敷

八丁堀与力屋敷の代官というのは、地行所から呼び寄せられた総代で、何人かの農民を手代に使い、筆頭与力の指揮監督を受けていたことなど、この佐久間長敬の記録によって初めて教えられるところである。重要な文書と言ってよい。

先にも記されていたように、南北百人の知行一万石の年貢米は、数か所に分散した領地から収納された。二五〇〇石取の領地なら四人の代官がいて、収納米や小物成（雑税）の収納配給に当っていたのである。彼らは与力屋敷借家に住んで、代官屋敷と呼称されていたのであるから、あちらにもこちらにも代官室敷があったわけで、そういう事情を知らぬ人達は、与力の屋敷すべてを代官屋敷と理解していたのも無理ではない。

八丁堀の知行地がどことどこにあったのか詳らかではない。ただ一か所解っているのは、原胤昭氏が、『江戸文化』一巻五号に寄せた「おけいこと手習」という文章に引用された、元与力都筑氏所蔵の「与力同心由緒書」（元禄四未四月書上写）に、金杉村が御神領となった時に替地として「下総国行徳領の内、菅野村、八幡村、二又村にて被二下置一候」と文言のあるのは重要である。

行徳村は塩の産地であるから、「小物成」として塩が八丁堀へ送られてきた。与力原氏の家では、年に四樽の味噌を作り、千本の大根を漬けたので、「納め塩」だけでは足らず、何俵か余分の塩を買ったそうである。漁村から上る小物成には正月用品のゴマメもあった。山林のある村からは、正月松飾の松が山のように送られてきた。与力の家にはこうした雑収入が多く家計を潤したから同じ二百石でも御蔵前取の二百石とはよほどの相違があった。与力の家が豊かだったのは、こうした雑収入が多かったからであった。

○八丁堀与力の生活

八丁堀が、江戸時代に与力・同心の拝領地であったことは、衆知のことでありながら、さてその日常生活ということになると、詳しいことほとんどわからない。ところが、幸なことに、町奉行佐久間健叟の三男で、母方の与力原氏の姓を継いで、町奉行付与力となった原胤昭氏が、晩年に『江戸時代文化』という雑誌に、年余にわたって書かれた「八丁堀与力の生活」という一連の報文があって、教えられるところが頗る多い。

南北両奉行配下に属し、八丁堀に屋敷を拝領していた与力は、地方取二百石、三百坪から五百坪の土地を拝領していた。（同心は五・六十坪から百坪くらいを拝領していた。）それに盆暮には出入の屋敷から付届があったから生活は豊かであった。胤昭翁の記しておられる与力の生活は、われわれとは段違いに水準が高く、それに旧慣を墨守して、古来の武家年中行事を正確に守り伝えていたように見える。いずこも同じ正月風景ながら、与力の家の正月はまた格別に折目正しい。ここに原氏の文章を紹介しておきたい。

（資料は「江戸時代文化」第二巻一号、昭和三年一月号による。）

江戸町与力家庭の年中行事

原　胤　昭

何か江戸の話を聴かせろーとおっしゃる高木さんの御懇望にほだされ、一番覚えているはずの家庭談をしましょうとお約束したのは、ついこの春。私は常に出獄人を保護する、はなはだことの多い社会事業を手にもち、しかしておやじ独りボッチでやっていますので、実際時がなくってついつい。ところで、はや今年も節季、何か絞りださなければすまなくなった。しかし年寄のご奉公、確なお話をせなくってはとぞんじ、八十近い姉と、これもひとつ八丁堀に住んでいた親類どもの老婆三人を相談相手に引張りだして、こんなお話を纏めました。（中略）年中行事といっても、与力五十軒ことごとく同一ではない。家々に式例がある。前にも申したとおり、家柄がれっきとしていた伊豆の伊東系だ、鎌倉の大宅系だ、三浦だ千葉だ新田だと、旧格家例によって特色があって、なかなかやかましかった。ここには、与力として旧家であった千葉系、私の養家原、三浦系、私の実家佐久間などを中心にとってはなします。

正　月

門飾り　お話はまず元旦の夜明から始めます。門飾は旧年内、師走の二十

八日に建てる。表門は冠木門（かぶきもん）である。門の柱から三・四尺前に少し掘って、三寸角の荒木柱二本を建て、上手（うわて）に穴を穿（ほ）り、中貫をわたし、木戸門の形に造る。柱に添えて左右へ黒松と笹葉のついた竹とを結びつける。また同じ笹の竹を、葉を左右に出し、中で根本を合せ、横の貫へ結つけ、飾り門の形を造る。この飾り松は、領分である知行所の百姓から、年々吉例として送って来た。飾った門柱の根本へは、奇麗な太い松薪を幾本も立てて丸く巻き、太い藁縄で化粧結びをする。ぐるりの地面へ銀砂、清洗した川砂を蒔いて盛る。

注連かざり　六尺長の藁飾を、上の横貫へ結びつける。中真（心）の下げ藁を左右へ別け、そこへ、うらじろ、ゆずりは、板昆布をはさむ。その上へ、だいだい、海老、福包を結びつける。福包は小奉書紙二枚を外皮として、中へ、かや・かちぐり・ほんだわら・白米ひと摘みを、三・四寸径の鞠形にし、紅白の水引の端を揃え、ちぢらして飾る。福包へ入れるものはまだあるのだが失念した。

この乾海老は、毎年例として、新場の魚問屋「さぶ」奥三郎兵衛より蔵暮の贈物に呉れた。七尾をきれいな青竹の魚かごに盛れてあった。新場の魚川岸は、新場橋西の材木町河岸である。

玄関前の飾り　すべて元朝は箒を使わないのを吉例とした。だから大晦日は深更まで屋敷の掃除だ。掃除する下僕や出入の諸職人たちは、高張り大提灯を諸所に建て、手に手に弓張り提灯を持ち奔走する。それはそれは勇ましい賑やかなものであった。

ゆえに元旦の玄関先には、塵ひとつなく清められている。正面玄関の左右柱前へ枠（わく）を建て、三・四尺の根松を結びつけ、四・五尺大の軒飾を鴨居に打つ。下げ藁の間々へ、うらじろ・ゆずりは・切り紙四手五・六枚をさす。

室内のメ飾り　大小の輪飾を懸ける。うらじろ・ゆずりは・切り紙四手をさす。飾る所は室内ことごとくである。仏壇から居間・部屋・納戸、どこからどこまでも、一区画をなしている室は残りなくだ。土蔵・物置・台所・湯殿・大小雪隠まで、すこぶる奇異の体ありだが、台所にも荒神あり、湯焚き場にも火の神あり、便所にも雪隠の神様ありと信じていた余音でがなあったろう。

鏡餅　大形白木の三方台に載せる。餅は円形にとる、おそなえ餅である。そうして厚く仕立てた、のし餅三枚を菱形に切り、お供えの上へ重ねて飾る。

菱餅の上へは、ゆずりは・うらじろを敷き、板昆布を垂れ下げ、そこへ、橙・海老・福包をのせ飾る。お供え餅は大小数十個を造り、白木の三方台、或はお供え盆へ白紙を三角に折敷き、うらじろ・ゆずりはを敷き、その上にお供え餅をのせる。神棚の神々、荒神様、仏壇に並べた諸仏体へ供える。

歳神棚　これを恵方棚という。玄関の天井へ特設する。恵方は年毎に祭壇をおき難く、ゆえに白木の棚板を備えおき、当年の恵方に向け、玄関の天井より釣り下げ、歳神棚を造り、五寸径のお供餅と一対の神酒を供える。

以上の行事は元旦の暁前にことごとく設備するもの。これ皆主婦指導の下に家族婢僕の奔走するものなれば、みな撤夜して新朝を迎えるようになる。

子供や若い者は、お正月が来るので嬉しくって寝られない。のみならず、ことに彼らを寝かさない、こんな伝説があった。「大晦日に眠ると、歳の神様が怒って、すぐ年をよらせて、元日からおぢいさん、おばあさんにされてしまう」と。

もう一つ大晦日に眠られないことがあった。それはまたこういう伝説である。三が日（元日二日三日）のうちに禁止詞がある。第一がねずみ。第二がなべ。第三が箒。この名詞を口にだすと、その年は運が悪い。病難災難何か厄難が降り来たる、と。もしこの三つのひとつについて、必要上発言せねばならないときは、鼠はおふく、鍋はおくろ、箒をおなぜというのだ。ところがこの日は年越しだ。元日だ。なかなか事の多い時だ。誰かが、必要上放心して、この忌み詞をいってしまう。そうすると、そらいった。誰がいった彼がいったと、家内中の大笑いになって賑う……。

元旦、切り火　新調の火打ち箱を携え、若党神棚前に座り、火打ち鎌火打ち石にて打ち合い、切り火を出し、ほくちに移し、硫黄をつけた角形の附木に燃し付け、神前に供えた油皿に浸したとうすみに点じ、燈明を神前に供う。諸神棚、仏壇に同じく。

主人は未明に寝所を出で、入浴結髪礼装を整え、表座敷に座す。

服装　主人、熨斗（のし）目、麻上下。夫人、かいどり、模様。子供男、紋付、麻上下。女、ふりそで、模様。

若水　表座敷に家族の着座、やや定まるころ、若党勝手元より手桶にいれた水を持出し、つぎに塗盆へ手水柄杓、白木曲（まげ）もの製の底浅の柄杓と、新しい手拭をたたみて添え、椽先に据える。

若党手を仕へて、「おめでとう存じます。若水を召しませ。」と一同へ挨拶して下る。

若水とはこの年初めて汲みあげた新しい水である。大晦日の夜中に、元旦の勝手用水はことごとく汲み溜めて、井戸側を洗い清めておく。

元朝には飯焚下男、若水を汲む当役である。まづ井戸側の椽へ塩をつまみ積むこと三か所、しかして下男は拍手を打ちて井戸神様を三拝し、前に積んだ塩をつまんで、井戸の内外周囲にまいて井戸を清める。立会役は若党である。汲みあげた水、即ちこの年始めて汲んだ水を新しい手桶にいれる。

これが若水である。主人若水を使い手を浄め、拭うて席に着く。ついで、夫人その他家族順次に若水を使い浄む。

主人は洗手直ちに神仏祖先の祭壇を拝し、祝の席に着く。ここで一同祝の詞を交換して、喜びの挨拶をする。

おとっさんおめでとう、おっかさんおめでとうといった。おとうさん、おかあさんといわなかった。にいさん、ねえさんといった。おにいさん、おねえさんとはいわなかった。

雑煮の祝　膳部の器具から話ましょう。

膳　ちょうあしの本膳、外部黒塗、内部朱塗。正面両側のふちへ金蒔絵、家の紋所。

おやわん　黒塗内朱塗。わん並にふたへ金紋。

汁わん　ひら椀、つぼ椀も同じ黒塗金紋。

たかつき　外黒塗ひら朱塗、台へ金紋。

生ま酢皿　瀬戸物。

柳箸　柳の白木、太い丸ばし、箸袋、小奉書紙を一寸五分巾に畳み、裾を折る。折紙より紅白水引を膝折に結ぶ。箸は万一にも折れては不吉なりとて太いそげなきを選む。

箸袋の表へは、且那様、奥様、家族には、おいと様、弥三郎様などと用る人の名を書く。これは給仕の用意なるにより敬称を添う。柳箸は正月中の祝膳には幾度も使う。

雑煮の盛りつけ　おやわんに二片づつ盛る。なまぐさ、といって生酢皿へゴマメ二尾、頭のついた格好の良きを選む。高つきへ沢庵漬大根二片。雑煮餅は中々大きなきれで、三寸に二寸ほどの角。四分五分位の厚さ、二片を椀へ盛ると蓋は盛りあがる。

雑煮の祝餅にも伝説ありて、祝の席を賑わす。餅の数を喰い減らすとその年中の運命が減る。元日よりは二日に多く、二日よりは三日に多く喰えと。そこで、珍らしいのと味噌汁の餅がうまいので、元朝に多く喰うから、二日目更に三日目には喰い勝てないので、大笑いとなって賑わしたものだ。

雑煮の仕立て方　味噌汁、仙台味噌を用いて仕立る。脇き菜は、里芋、小松菜、焼豆腐、いずれも湯煮をしておく。餅は釜に湯を湧しおき、もちざるに盛り、ゆでて引揚げ、水分のしぼれたとき味噌汁に入れ、一寸煮て脇菜とともに椀に盛る。はながつおは、小さな蓋重に入れ、菜箸を添える。

屠蘇の祝　雑煮の祝すみて後、給仕の二婢、床の間の前に進み、違い棚より卸して、一婢は銚子を、一婢は盃と喰つみの重ね重箱を並べた広蓋盆をはこんで、主人の正面に供し、三つ組の盃を台のまま差出し進め、重詰の肴を取って供す。主人三献の祝盃をあげ、次席の主婦へ、それより席順に盃をあぐ。

喰つみ重箱　盛る肴は、てりごまめ、昆布巻き、長芋、蒲鉾、玉子焼を一重へ、黒煮豆一重、数の子一重。器具は屠蘇道具と申し、一家伝来の品有り、金蒔絵、内梨子地塗、今でならば立派な美術工芸品。私は毎年お正月の仕度をする時母が話したのを覚えている。

これだけは御先祖様から伝ってる品なので、天保の御趣意の時にも、こわさないでしまえたのだと。屠蘇の銚子へは、つるの前へ小さな根松と敷こうじ、実のついたのを、折のしの形に白紙をたたみ根を結び、紅白の水引にて飾りつける。

主人の初出　元日の祝の膳すみし頃中働きの家婢進み来て、供廻り仕度整いたることを告ぐ。主人は会釈して玄関に向い、奉行所に参礼す。夫人をはじめ子女弟妹皆立って玄関に送り出でて坐す。

浄めの切り火　主人、玄関敷台を離るる頃、中働きの家婢、用意している火打ち鎌と火打ち石を携えて中央に膝を屈め、主人の脊後より、カチカチカチと三度に切り火を打つ。送り出た一同は辞義す。

供廻り　若党、大小刀を差し、背割羽織、たっつけ袴。紺足袋、鞋。

御用箱持ち。草履取り。鎗持ち。挾箱かつぎ。各下男一人、紺かんばん、あさぎ股引、萌黄ふと帯、すあし鞋。

召使う男どもを、下男と呼んだ。仲間と呼ばず、僕といわなかった。

私どもの家は南の組で、奉行所のある数寄屋橋まで、ちゃらちゃらと雪駄の音高く歩いて行くには、だいぶ時がかかるので、八丁堀の自宅出門は、夜明け、漸く東天の白む頃、しかも陰暦で一ケ月後れている。今の二月の初めという極く寒い時だ。当今よりももっとからっ風が吹いたようだ。けれども家庭の万事万端が清浄と新鮮に満されるので、新年の気分をつやしく（原文ママ）感じま

した。

おかえり　主人は奉行への年礼をすませて帰宅する。門に近づくと草履取りの下男、駈け抜けて門に入る。家の奥まで聞えるほどの大音声にて、おかえり、と呼ぶ。これは一と声にて呼ぶを例とす。下男の一芸として、声自慢をしたものだ。この声を聞けば、家族は前のごとく、玄関の一と間に居並びて迎礼す。

元日の昼飯　祝膳には白飯味噌汁、なます。大根にんじんのきざみ、さいたゴマメの三杯ず。おひらへおせちを盛る。おせちのにしめは、蒲鉾、きざみするめ、こんにゃく、焼豆腐、ごぼう、にんじん、しい茸、香物、浅漬大根。

主人の神参り　氏神である山王権現今も茅場町にある日枝神社、次に菩提所に参し、祖先を拝す。供廻り、若党、下男。

元日の夕食　平常のとおり。

正月の記事は、まだたんとありますが、あまり頁を埋めるとわるいでしょうから、記事のすくない月のところで埋めましょう。

原胤昭翁の八丁堀追憶談は正月に続いて歳の暮まで、連載されている。

○八丁堀の初午（二巻二号）○八丁堀の雛祭（二巻三号）○八丁堀の灌仏会（二巻四号）○八丁堀の端午（二巻五号）○八丁堀の暑中（二巻六号）○八丁堀の棚機と盆（三巻七号）○八丁堀の八朔と月見（三巻八号）○八丁堀の菊の節句と十三夜（三巻九号）○八丁堀の玄猪祝ひ（三巻十号）○八丁堀の七五三祝（三巻十一号）○八丁堀の歳の暮（三巻十二号）

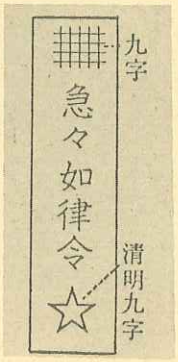
○正月行事、九鬼の札切

九鬼というのは、デーモンではなくて、江戸時代に北八丁堀に上屋敷を構えていた。丹波国綾部一万九千五百石の領主、九鬼式部少輔家のことを指す。この九鬼家では、いつの頃からか、毎年堅固な門松を立て、それに呪文を書いた札を正月七日の間、次第に大きなものを取り替えて釣り下げるしきたりであった。その札を手に入れると、その年は運がよいと称して、近隣に住む若者達は、日々閉門を持ちかねるようにして、いっせいに争奪戦を演じた。全国的に見てもちょっと比類を見ないこの正月行事を「九鬼の札切」といっていたのである。

明治維新後、九鬼家は退転して八丁堀を引払い、行事は自然消滅し、大正初年の頃には、その行事を知る人も甚だ稀になった。雑誌『江戸』を編集しておられた、江戸旧時采訪会幹事平山成信氏がこれを嘆いて、八丁堀与力出身の文化人今泉也軒翁にこのことを質ねたところ、也軒翁から詳しい返信が届いた。この書信が、雑誌『江戸』の第三巻第二号に載ったのは大正五年三月のことで、その行事を知る人のいなくなった今日、記録を重んずる意味でその書信をここに転載しておこう。

御尋之九鬼の札切と申候ハ、九鬼家上屋敷（現今日本橋区坂本町四拾番地坂本公園消防分署紅葉女子小学校之地）に、正月元日より七日迄ニ行はれし事ニ御座候。小生の生地現今北島町壱丁目壱番地、町奉行組屋敷の一角にて出生候事故、日々見物ニ参リ申候。

九鬼家の表門ハ新場橋の川に面し大原大明神の社地ニ向ひてありし。旧幕時代の大名の松飾ハ、いづれも間口大きく立派の事に候ひしが、九鬼家の松飾ハ、殊に堅固ニ作られたり。大体餝の柱ハ八寸角位の荒木にて作られ、其上ニ松竹注連をつけ、海老橙常の如く餝られ、注連の中央に札を下げられ。其札ハ、表ハ何やら記臆ニハ無之候へども、裏ハ



とありしと覚ゆ。

此札を、元日ニハ壱尺五寸ニ、巾三寸位と見ゆ。日々漸々大キクなりて、七日の札ハ弐尺位ニ内ハ四五寸と見ゆ。此上端に穴をあけ、麻縄ニて注連の中へ隠るる程につるすなり。

其縄も日々太くなりて、元日ニハ六枚糸位ニて、七日ニハ細引位のを用らるる。

而して、日々左右に餝手桶に水を張り、三箇ツツつみてあり。其脇ニ足軽の者なるべし。六尺棒を杖きて立番をして居るなり。

夕七ツ時（今の午後四時）になれバ、左右の手桶の水を捨て、門内へ取込み、棒突ハ門内ニ入リ、中央大門を閉る也。

札をきらんとする者ハ、各友人を頼みて、多きハ五十人位、少なきも三十人位、各静粛に待ちて居る。此団体三組も四組もあり。大門のしまるを合図に注連の下にかけ行きて、札へ飛付くなり。

各の党派の者ハ、他の党派をよせつけじと争ひつつあり。地上から注連迄ハ八九尺位あれバ、飛付くに中々骨を折る事なり。兎角して飛付けバ、其者の友人大勢取り付きてぐるぐるまはる也。飛付し者ハ一生懸命

に札にかぢりつきあるを、下にてかつぎて廻る故に、暫くすれバ縄をねぢ切る也。此間も他の党派より邪魔をするを、壱部ハかつぎて廻り、一部の者ハ他の者よせつけじと防禦す。其騒中々喧しき事也。

終にねぢ切れバ、此切りし者を胴上ケにして、其辺五六丁の間をヨッショイ〳〵とかけ声し、手を打ち大声をあげて祝しつつ巡る也。其切りし者もかつぐ者も、正月小袖の新しきを破綻るにも構はず、騒ぎまはる也。こを誇りとする也。日々此の如し。

此切る者ハ多くハ新場河岸の魚屋より出る也。他の町よりも出るなれども、新場には常に閑静を心掛る者も多く、馴たれバ、大体新場へとらるる也。

一ト年角力の連中取に来て、是にハ終にとられたり。然れども、新場にも角力を贔負にする者もある故、其愛顧を失はんを恐れ、重立ちたる者より、角力の札切に出るを禁じたりときけり。

此札を切りし家ハ、持船或ハ神棚にかざり、其年ハ運よろしとて、友人をあつめ、酒宴を催す事なり。何故か此札を切りし者の家にてハ、切りたる年の壱ケ年の間鮭を喰はず。先ハ荒増右の通に御座候。

文章が候文で、少しく読みづらいと思うが、行事の模様は紙上に躍如として見るがごとく、百余年前には、区内にもこうした田園的で郷土色豊な行事が行なわれていたことに、驚く人が多いと思う。

也軒翁はなおこの書簡の後に附記して、世間に伝えるところでは、九鬼家では大晦日の夜、鬼と藩主とが酒宴をして、藩主には氷砂糖の吸物を出し、鬼には燧石（火打石）の吸物を出して、たがいに問答があり、結局鬼が負けて、この札を七枚書くということだと記し、先年九鬼家の人に問うてみたが、詳しいことは分らなかったといっておられる。

氷砂糖がわが国に伝わったのはそう古いことではないと思われるが、その点がすり変えられているとしたら、鬼が貴人に賭を申し入れ、おもわくに反して敗をとり、代物を提出するというモチーフは、すでに紀長谷雄雙紙絵巻に見えている。そうした古代貴種の家に伝わる伝承を九鬼家が伝え、年中行事として伝承していたのは珍重に価する。

しかもそれが、江戸屋敷で行なわれ、江戸の正月行事の名物の一つとなっていたこともはなはだ興味深いことといわねばならない。

以上を書き終って、四壁庵茂蔦の『忘れ残り』に、「大名の門餝」について記してあったのを思い出した。書庫へ入って『続燕石十種』を持ち出して検したら、九鬼家の松飾についても記すところがあり、也軒翁の記事を補足する部分もあるので、煩をいとわず更に引いておくこととする。

正月松の内、八町堀九鬼長門守殿の表の松餝に、蘇武将来子孫家と書し札をかけらる。申の刻に至りて門のしまるを待ち、魔除けなりとて彼の札を取らんと集る者数百人なれども、只一枚の札なれば甚得がたし。漸々にして取れども人に奪はれ、其うばひしものもまた人に奪はる。其の混雑する事甚し。能く取り得るものは、戦場に一番の印を上るよりも難し。佐竹家には松を立てず、門の左右に人を多くならべ置き、これを佐竹の人餝といふ。鍋島家は松かざりのうへに、藁にて鼓の胴をつくりて餝る。甚見事のものなり。

南部は橙野老神馬藻昆布に添へて、塩鯛の大なるをふたつならべて餝る。

と、江戸の諸藩邸の門松にそれぞれ特色の存したことを記していた。

四壁庵の記すごとくであるならば、九鬼家の門松に下げる木札の表には、朝鮮風の魔除けの言葉が書かれていたことになる。それとわが国の陰陽道の呪文とを表裏に認めたその木札は、幸運をもたらすためのまじないではなくして、本来的には魔除けのまじない札だったのかも知れない。

四壁庵の記事の末段には、もう一か条「馬喰町にかぎり、戸毎に竹ばかりを立て、注連を引きわたし、松は用ゐず。」という、聞き捨てにできない記事が附してある。

馬喰町の旅籠屋街が、なぜ竹ばかりを立てて松を立てなかったのか、おそらく何か言い伝えがあったのであろう。古老の間に伝えるところがあるならば、御教示をえたいものである。

◇演劇講座 第11回

日時　二月十八日（土）
　　午後二時～三時三十分

演題　伝統の演技

講師　武智　鉄二　氏
　　（演出家）